

近ごろ考えること

浪江町長 馬場 有

今年も田植えの季節を終え、青々とした緑の草花の匂いに一日ずつ近づいてくる夏の気配を感じる日々となりました。

多少個人的な話にはなりますが、私にとって本は頭の栄養です。本が好きで、毎月1冊は読んでいます。

歴史上に名を遺した人物から学ぶことは数多くあります。江戸時代に米沢藩をたて直した上杉鷹山や儒学者・佐藤一斎の書いたものなどは、いまの時代にも十分通用する内容と言えます。

ここ数年は、歴史上の人物だけでなく、様々な人々に実際に出会って直接学ぶ機会が多くなりました。政治家以外にも芸術家や各界で活躍する人など、震災前には会うこともなかったような方々とお話する中で、井の中の蛙だったと思わされたことも多々ありました。

思い返せば、当然ながら親から学んだこともたくさんあります。震災直後、これからの町をどうしていったらいいのか考えていたとき、私の頭に「明けない夜はない」という言葉が浮かびました。それ以来、折に触れて使っていますが、実は父がよく言っていた言葉だと気づきました。震災から五年目を迎え、あらためて父の言葉をかみしめます。

明けない夜はない、とはすなわち「諦めないで努力を続ける」ということです。この諦めないという気概と「胆力」が、組織のリーダーには必要不可欠なものだと、震災後は特に強く感じています。

「胆力」とは、努力で鍛えられるものです。

野球に熱中していた高校生時代、ピッチャーの投げたボールの軌跡が一つ一つの点となって、まるで止まったように見えたことがあります。それまでの努力と練習があったからこそ、とても不思議な経験でした。

練習といっても、「気」の無い、何の問題意識も持たない練習をしていても何にもなりません。高揚した「気」をもって粘りよく努力を重ねた末に生まれるのが、「胆力」でしょう。

漫然とバッターボックスに立って、来たボールを打とうと思っても絶対に当たりません。バットに当たったとしても、ヒットにはならない。どういう気構えで、どういうボールを、どこでどういうふうにつか。常にそういう意識を持たないとうまくいかないということを、私は野球を通して経験しました。

何事においても常に問題意識を持つこと。その訓練をしていけば「胆力」は身についてくるものです。若い人たちはまさにこれからです。「気迫」や「エネルギーシユ」なところをもっと表に出して、その力でとにかく前に進んでほしいと感じています。

町の復旧・復興には、大きな課題や難題がありますが、「諦めない」という気概を常に持ちながら、果敢に壁に立ち向かってゆきたいと思います。

寒暖の差が大きい季節柄、皆さんくれぐれもお身体ご自愛いただき、体調をくずさないようお気をつけください。